今月の御聖訓

我が身、藤のごとく
なれど(も)ん、法華経の松にかかり
て妙覚の山にものぼりなん。一乗の
羽をたのみて寂光の空をも
かけりぬべし

【盂蘭盆御書　全集一四三〇頁】

目　　次

今月の御聖訓
お講講話 仏になる行は時によるべし …… 菅野憲道 1
続・日興上人御本尊調査記録〔3〕 …… 山上弘道 9
【行学研修会リレー発表⑤】〈私の信仰の原点を振り返って〉 …… 橋本義一 11
ちょっと寄り道⑲〈まさかの合格、不合格〉 …… 森田観道 13
「弟子分帳」と十七回忌〔十四〕 …… 松田銘道 14
天地つかの間〔その⑱〕 …… 成田詳道 18
恵日だより …… 19
二月の行事　如月詠草　恵日俳壇　訃報

表紙写真撮影:松井義信氏　題字:立正安国論より拝写

お講講話（要旨）

拝読御書　「聖人御難事」（全集一一九〇頁）

仏になる行は時によるべし

菅野憲道

《成仏得道の手本・熱原法難》

熱原法難は、日蓮大聖人一門にくわえられた度重なる弾圧が、一般の農民にまで拡大し、徹底的に弾圧しようという幕府の意志と、身命を賭して法華経信仰を護りぬこうとした法華信仰者の戦いでもありました。

すなわち、この法難は大聖人ご在世中におこった国家権力による弾圧、「伊豆流罪」、「竜口法難と佐渡流罪」に続く三度目の法難として位置づけられるものであり、しかも宗祖ご自身が直接の当事者ではなく、弟子日興上人教化の僧俗に加えられた迫害ですから、ある意味では、ご自身に加えられた法難より非常に厳しい受け止め方をされたようです。

それは大聖人一期の本懐たる法華本門の仏法が、末法の衆生によって命がけで受け止められて、未来に継承されるものかどうかの試金石となるべき事件でもありました。

また何と言っても修行も学問もない初信の人々が、果たして大聖人と同じように「不自惜身命」の信仰が貫けるものかどうか、その結果いかんによっては大聖人の法門が、ごく普通の人間には実践不能で、継承する者とて無い空理空論として画餅に帰する恐れもあったのです。

しかしながら、熱原の農民は、当時の最高権力者の平左衛門の脅しにも屈せず、神四郎・弥五郎・弥六郎の三人までが処刑されましたが、全員が一歩も退くことなく、不惜身命の信仰を貫いて、ついに放免され宗祖より「**熱原の事のありがたさ**」と賞される結果となったのです。

この熱原法難は近年こそ他門でも重視しておりますが、本宗においては古来より大変重要視され、大聖人の龍口法難と並んでこの法難こそ大聖人の化導の本懐を遂げられた事件であり、さらには師（大聖人）弟（末法の衆生）不二の成道の手本として、いわゆる戒壇御本尊を建立される機縁として相伝されているのであります。

熱原法難の経過および概要については先にお話しておりますので、本日はこの法難の意義を少しく現代的な視点をまじえて考えてみたいと思います。

《人道主義ということ》

我われが日頃御書を読んでおりますと、いたる所に法華経を信ずると大難があるけれども、そういう時に自分の命を捨てるほどの覚悟がなければ成仏できない、ということが書かれております。

また御書の中には、しばしば釈尊の「本生譚」といって、仏様が過去世において、まだ修行中であった時、一羽の鳩を救うために自身の足や腕などの肉を切り取ってそれに代えたとか、飢えた虎に我が身を布施したとか、あるいは雪山童子のように仏法の一偈一句を聞くために我が身を鬼神に投じたというような、仏法のために命をも捨てる修行をしたことがしばしば出ております。熱原の農民もこうした教説によって、仏法のため、信仰のために命を投げ出したのであります。

法隆寺玉虫厨子の「捨身飼虎図」

そうしますと現在の私たちの、生命よりも大切なものはないんだというような常識とは、どう結びつくんだろうという疑問が起こらないでもありません。

現代は、ヒューマニズムが社会の隅々にまで浸透し、人命尊重という考え方が非常に強くなっております。よく「生命は地球よりも重い」などといいますが、何よりもすべての人々の生命と人権を尊重することは非常に大切なことで、新聞などの論調も常に人道主義的見地からなされるのであります。

このような人命を最高の価値とする戦後日本のコンセンサスは、おそらく、かつての軍国主義が、いかにも国民の生命を軽く扱ってきたことの反動としての側面が強いと思います。

言うまでもなく、戦前までの日本人は「お国のため」に「滅私奉公」を教育され、個々の事情など一切斟酌することもなく召集令状一枚でウムをいわさず戦場にかり出されたものです。戦況が敗色濃厚になって、犬死にすることが分かっていても、徴兵を拒否できない。それどころか、兵器より人間が粗末に扱われたのであります。国民の生命と財産を守るべき国家が、国民に塗炭の苦しみを味わせてきた、その反省のうえに、戦後の国民は国家による思想教育や統制に強く反発してきたといえます。それとともに、軍国教育による「武士はくわねど高楊枝」的な精神主義を否定し、現実主義・功利主義的な物欲を全面的に肯定する風潮が形成されたのです。

また、もともとヒューマニズムは中世キリスト教の宗教的束縛からの解放をめざしてイタリアにおこったルネッサンス運動や一七・八世紀に英仏におこったキリスト教支配に対する市民運動に端を発するもので、教会が神の名の下に異教徒・異端者

を弾圧したり、神への奉仕を強制したり、神学によって人々を抑圧してきた歴史の教訓の上に立つものであります。ですから、今の人道主義とか生命尊重というのは、ある意味で中世キリスト教に対する一つの批判として、欧米社会に起こった人間尊重の考え方が今の日本の社会にも反映しているのであります。

したがって、明治維新と敗戦という二度の意識変革をふまえて、かつての日本人とは著しく感覚が異なって、欧米化された社会の中で、仏法における法難の意義など、果たしてどれほど本気で受け止められるものか、心もとない気がします。

《遠藤周作の殉教観》

「殉教」ということについて、今の日本人の代表的な考え方の一つの例として、遠藤周作さんの『沈黙』という小説があげられるかと思います。

この小説は、江戸時代の島原でキリスト教信者が弾圧された時のことを題材にして書かれたものですが、当時はキリスト教が日本侵略を陰謀する邪宗門として国家の禁制となり、切支丹の信者は改宗を迫られて、踏み絵を踏まなければ死刑ということになったのです。小説では、ある宣教師が大勢の信徒とともに奉行所に連行されて、役人の前で踏み絵を踏まされることになります。目の前で次々と神の教えを護って幕府に抵抗し、踏み絵を踏まずに死刑にされる人々を見て、その宣教師は大いに悩みます。一往便宜的に踏み絵を踏んで、後で神に懺悔したらいいのではとか、心で信じていればいいとか。そして宣教師は、思い悩みます。神の教えを守って死んでいく者を神はなぜ助けてくれないんだろうか。神が存在するものなら、なぜ罪深い異教徒に対して神罰を下さず、こうした悲劇に「沈黙」を守っているのだろうかと。沈黙を続ける神というものは本当に存在するのだろうかと。そうして迷った末に自分にも順番が回ってきます。そこで牧師は一転して、教えを守って死んでいくよりも、踏み絵を踏んで命を生き長らえた方が本当ではないかといって、転向するというのが『沈黙』のストーリーなのであります。

遠藤周作さんは子供の頃にキリスト教の洗礼を受け、その縁で戦後いちはやくフランス留学の経験をもつ文学者ですが、その人にして、神の存在が、現代人の理性では信ずることが出来ないことを正直に告白しているのであります。

故遠藤周作さん

殉教をテーマにした『沈黙』

とくに二度に亘ってヨーロッパを焦土に化した世界大戦の悲惨さは、神の存在を疑わせるに十分なものでしたから、戦後の欧米においても、懐疑的な無神論がより強まっていったと思います。

恐らく遠藤周作さんは、ヒューマニズムの立場からみれば、進駐軍によって力を得たキリスト系諸教団によって神や殉教が語られる時、かつての軍国主義下の美談、すなわち爆弾三勇士や特攻隊等とどれほど違うのかという意識もあったに違いありません。

殉教者を美化して教会のプロパガンダの役割を果たさせ、民衆を教団が精神的に支配する道具立てとして利用されているのではという疑問であり、さらには、殉教そのものの持つ悲劇と、神の存在そのものに拘わる疑問であり、マルクスが「宗教は阿片だ」といった、宗教そのものに対する疑問ではなかったかと思います。

この信仰と殉教ということについて、まだ遠藤周作さん自身がどのように捉えるべきか、結論もでないまま、「自分としてはむしろ因縁観を説く仏教的な考え方に引かれる」といいつつこの世を去ったのでした。

ところで、この生命尊重という立場と、殉教という問題は多くの矛盾をはらんでおり、いまの社会で日蓮大聖人の信仰をしている我われにとっても、熱原法難を過去の歴史的な事件として意識の外に葬り去るのではなく、現代的な問題として受け止めなおすことは、大変意味のあることだと思うのです。

《正義に生命を賭すことの難しさ》

今の時代に、生命の尊厳がさけばれ、地球上からかつてのような非人間的な悲劇を無くしていこうということは本当に大切なことで、仏教者にとっても「慈悲」の精神や「悉有仏性」という考えから他者の生命を軽んずることは厳しく誡めております。不殺生戒という具体的な戒律にもそれは含まれております。

今の時代に、仏法のため命を捨てるなどということがあれば人命軽視だとか、時代錯誤だ、非人道的ななどと言う批判が返ってきかねません。

しかし、肉体的生命が最高のものであるという生命尊重主義から、また色いろな矛盾も出てきております。それは終末医療の現場などに端的にあらわれておりますが、余命幾ばくもない瀕死の老人を、最新の医療技術は各種の延命装置を駆使して、生きながらえさせることが出来ます。たとえ意識が混濁して植物人間のようになったとしても、とにかく心臓を動かして延命を計ることができます。こうなってくると、ほとんどの現代人には自然な死ということは望むべくもなく、老衰や病との悪戦苦闘の中で、刀おれ矢つきるまで死を受け入れることが出来ないという状況があるようであります。はたしてこのような状態を生きていると言えるのかどうか。

そして医療技術が高度に進むほど、経済的な代償も高くつき、数十円のワクチンひとつ手に入らずに死んでいく難民の子がいる一方で、終末医療にかかる経費が平均数百万円等という、いかにも非人間的な矛盾が広がっております。まして医療技術が

どれほど進歩しても死を克服することは永遠にできないのですから。

我われ仏教者も人命尊重ということ充分わかっているつもりですが、しかし一方で日蓮大聖人が「人久しと雖も百年には過ぎず」と仰って、「命限りあり、惜しむべからず。遂に願うべきは仏国なり」と仰せられた意味をもよくよく考えなくてはならないと思います。

この人生、この命が、ただ肉体的な生命だけが最高であるとするなら、そこに残るのは物欲だけであり、普遍性も歴史性も否定されてしまうのではないでしょうか。限りある人生であるからこそ、人はその人生をただ徒らに肉欲に振り回されて生きるのではなく、真実の道、永遠なる価値を求めて燃焼させるのであり、「朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり」というように、命よりも尊いものの発見に全力を傾けようとするのです。

さらには、目に見える現実がすべてで、この肉体的生命こそ最高の価値であるとするなら、それは、自分が他者と全く孤立した存在で、やがて死を迎えて虚無に帰するという信仰であり、まったく絶望の思想でもあります。人間の生命も自然界も何ら相違のあるはずもなく、過去から現在に、現在からまた未来に貫かれた因果の法則の中の一現象としての存在だということは明らかなことで、けして人間だけが特別の存在ではないのであります。

少なくとも生命尊重ということは人間が社会生活を営む上での規範であり、人間自身が自分の人生を「いかに生きるか」とか、「人間とは何か」という宗教や、人生哲学の次元での話ではないのではないかと思います。

アウンサン・スーチー女史

《生命よりも重いもの》

今までの人類の歴史には、社会的にも何度も変革があって、独裁制から共和制に変わったり、あるいは軍事政権が打ち破られて民主的な政権に変わったりしてきましたが、こうした変革は多くの先覚者の尊い犠牲の上に為し遂げられてきましたし、あるいは迷信を打破して科学的真理を社会に啓蒙するためにも大勢の人々が、文字通り生命を賭して戦ってきたことは、歴史の教科書が示すとおりであります。

日本の例でいえば、幕末における国家存亡の危機に、高杉晋作や坂本龍馬をはじめ多くの志士たちが妻子を捨て、身命を捨てて、日本の近代化のために奮闘した、その尊い血と汗と涙の上に近代日本が存在しているといっても過言ではありません。

また現在も、ミャンマーの軍事政権によってアウンサン・ス

ーチーさんなどはいつでも生命の危機にさらされながら、民主化のために闘っているのであります。この様な例は枚挙に暇はなく、何れも生命よりも大事なこと、血を流しても、守らなければならないことが、現実社会においても数多くあることを示していると思います。

さらにはペルー大使公邸での人質事件なども、こうした矛盾が表れております。以前より日本の政府や企業がテロや犯罪に対して弱腰で、人命尊重の名分のもとにいとも簡単に犯人の要求に屈して多大の賠償金を払ったり、服役中の犯罪者を解放したりしてきた。そうしたことが悪循環となって、日本が狙われやすい大きな要因ともなり、国際的にも日本政府の対応に対する不信となっているようです。欧米では血を流しても守らなければならないルールがあるというのが国民的コンセンサスであるといわれます。

このように、人間の生き方として見た時、世間のことにおいても生命を賭して守らなければならないもの、命に代えても譲れないものがあることはあきらかです。

宗教というものも、人生の根本となるような生死観とか、世界観を教え、人間の存在を善にも悪にも導くのですから、宗教の正邪ほど重要なものはありません。いまの日本で際限もなく政・官・財の腐敗が続いていることは、心の内に律すべきものをもたない無宗教の風土と無縁ではありません。

《熱原の農民たちの殉難の意味》

熱原の農民が命をすてて法華信仰を貫いたことは、幕府が権力をかさにきて、改宗を強要したことへのプロテストという面もあったかと思います。当時の人間は現代人よりはるかに誇りをもち、名を大切にしましたから、幕府が力ずくで改宗を迫っても、いなむしろ幕府が権力ずくで非道をおこなおうとすればするほど強くなった側面もあるかと思います。

また一所懸命の語が示すように、当時の武将はいつでも命がけでしたし、まして権力の座にあることは、命を軽くして闘争に打ち勝ってきたのですから、こうした武将を相手に、対等に自分の信仰を主張しようとすれば、命がけでなければならなくなるわけです。

この事件は、幕府の威信をかけて得宗領駿河国内に於ける日蓮門下の一掃を狙っていた意図的なものですし、この弾圧に成功すれば第二第三の弾圧に発展することは充分予想されたことでしょう。また、中途半端な妥協がますます幕府をつけあがらせ、事態を悪化させるばかりであることも。

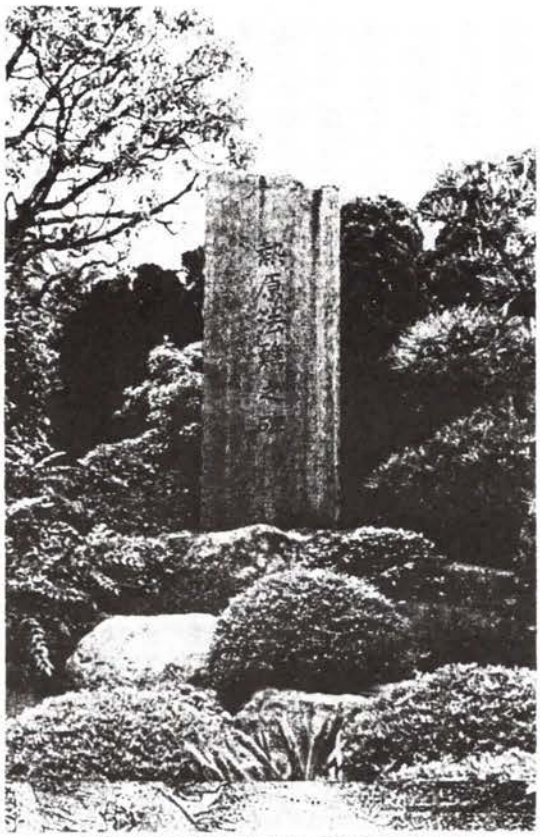
こうした状況下で、恐らく熱原の農民も正面突破以外にないと覚悟を決めていたのではないでしょうか。いまこそ仏法のためにわが身を供養する時であると。

一説には、この時農民の中で一人の女性がいたと言われます。この女性が涙を流しているのを、役人どもが「やはり女だ。怖くて泣いている」といったのに対し、「そうではない。自分も法華経を信ずる者として、真っ先に身命を賭すことを本懐と思っているが、女だと思って軽んじられるのが悔しいのだ、自分こそ先に処刑してもらいたい」と言ったため、興ざめして処刑が中止になったともいわれております。

結局、これは法華経寿量品の「一心欲見仏不自惜身命（仏法のためには身命を惜しまず）」という経文を、熱原の農民が身をもって読んだのであります。

これは法華経の教えそのものが、末法という時代は他の宗教で言うような絶対神とか、創造神というものは存在せず、無仏の世といって、仏様もいらっしゃらない時代であるから、神仏の力にすがって助けてもらうというような教えではなくて、むしろ自らが法華経を行じて、自らが成仏していこうという時代なんだということを考えなければならないと思うのであります。

したがって、仏様に助けてもらうとかもらわないということでなく、自らが願って法華経を修行するならば、三類の強敵が現れて結句は身命に及ぶこともあるけれども、その時に不惜身命の信心を貫いたら必ず成仏がかなう仏説を、身をもって実践したのが、この法難の一番重要な意義なのであります。



殉難の地に建立された「熱原法難之碑」

大聖人はご自身でも種々の大難をぐぐり抜け、何度も死を乗り越えてこられた方でありました。つまらないことで命を落とす人間はいっぱいいる中で、法華経のために自分の身命を奉ることができることは真に有難いことだといわれるのは、自らそうした体験を有する大聖人の切実なさけびであり、本当の意味での慈悲だったと思うのであります。

三世の諸仏も、釈尊も大聖人も同じように仏法のために身命に及ぶほどのことを何度も体験された。その修行の中から初めて法華経の大確信を得たのに、弟子の人々に対して違うことを教えるはずもないわけであります。

人情から考えれば非常に不憫ではあってもそのことが本当にその人にとって大果報、大功徳を受けるんだということの確信があるからこそ、「**彼等には、ただ一えん(円)にをもい切れ、よからんは不思議、わるからんは一定とをもへ**」といいきられたのであります。この大聖人の慈悲に感応したことが熱原の農民の信力となったのだと思います。

このことは、大聖人だけではなくて、名もない弟子の農民が法華経を身読することによって、はじめて、末法の一文不通の衆生が師弟ともに妙法の信受をもって成仏がかなうという、衆生成仏・凡夫成道の手本を示されたものでもあります。

さらにはそのことによって、我々がよくいう「蔵の財よりは身の財、身の財よりも心の財」ということの、心の財ということを身をもって実証されたことになると思うのであります。

《仏になる行は時によるべし》

しかし、信教の自由が保障された現代社会で、信心の故に死刑というようなことは、まずないだろうと思います。人は、それぞれにいろんな因縁があってこの世の中に生まれてきて、それぞれの立場で修行しているわけです。ですから、家庭の中の親子の関係で葛藤しながら修行させられている人もいるでしょうし、職場においていろいろな人間関係に揉まれながら修行させられている人もいるでしょう。あるいはもっと大きな社会とか国家とかの局面で修行させられる人もいるかも知れません。それらはいずれにしても、我々にはよくわからないけれども過去世からのいろいろな因縁によって使命が与えられたり、あるいは自ら試練というものを望んでこの世の中に生まれてきたに違いないのであります。ですから、皆んなが熱原の法難のような、極限的状況に値うということではありません。

日妙聖人という方に宛てられた御書には、

「正法を修して仏になる行は時によるべし。日本国に紙なくば皮をはぐべし。日本国に法華経なくて、知れる鬼神一人出来せば身をなぐべし。日本国に油なくば臂をもともすべし。」

（「日妙聖人御書」全集一二一六頁）

と、仏法を修行して仏になるということは時と場合に依るのであり、本当に仏法を守るために生命を投げ出す必要のある時には、それが大切ですが、何でもない平和な時に軽々しく命を投げ出すなどということは、いかにも愚かなことであるとの仰せです。

いまは政教分離が行われて基本的人権や信教の自由が保障された平和な世の中ですから、国家権力による弾圧や迫害などということがある時代ではないのであります。ほんの少し勇気と忍耐心をもち、いざという時のために不惜身命の気構えだけは腹にしまって、慈悲心を忘れずに諄々と法門をもって教化していけばいいのだと思います。

ただいずれにしても、人間誰しも必ず死をむかえるのですから、最後臨終の時に迷ってあたふたしないで、すべからく、ただ一心に南無妙法蓮華経と唱えることが出来たならば、自然に不惜身命の信心を成就出来ているのではないでしょうか。

熱原法難は、法華経の中には四菩薩として表現されておりますけれども、上行菩薩の再誕日蓮大聖人に呼応して、この世に出現し、身軽法重の姿を身をもって末法の一切衆生に示した地涌の菩薩だったのであります。またこの姿を、衆生成仏の手本として戒壇本尊に結びつけて相伝されたのが大石寺法門だと信ずるのであります。

信心のつたない我われですが、名もない熱原の人々にできた信心です。われわれも、いざという時こそ腹を決めて大信力を奮い起こし、一心にお題目を唱えて乗り越えていってもらいたいと思うものであります。

南無妙法蓮華経

（了）

続・日興上人御本尊調査記録〔三〕

山上弘道

**〈平成八年十一月十二日
千葉市・福正寺調査　西山本門寺末〉**

福正寺は昨年調査をしたかったのだが、先代森本日正上人がお亡くなりになり、御虫払いが中止になって取りやめになったのである。今年再度挑戦ということで連絡を取ると、よほどの雨でない限り執り行いますとのことであった。写真撮影の許可も戴いたので心ウキウキであったのだが、前日の天気予報はなんと千葉県地方は大雨であるという。なんたることぞ。当日朝、やはり天から大粒の雨が容赦なく落ちている。しかし、念のため電話で予報を聞いてみると次第に雨は上がるだろうという。それに一縷の望みをかけて祈るような気持ちで朝霞を早朝五時半出発した。こうなると午前九時という御虫払いの時間もうらめしく思える。車は東京外環から首都高速、そして東関道と千葉に向うが、進むにつれて心なしか雨足が激しくなるようである。これはもしかするとダメかも知れないと思いながらも、ここまできたらダメモトで突撃するしかない。時間調整をしながら八時半頃に福正寺に到着。この時雨はホントに突然の如く小降りになった。

おはようございます、と勢いを付けて玄関をくぐる。大奥様が出てこられて今どうしようかと悩んでいるところです、でも取りあえずお上がりになって待っていて下さいという。当方もここまで来たら拝見したいし、あまりに湿気があれば御本尊の為には良くないし、複雑な気持ちで待っていると、三十分ほど経ったであろうか住職が袈裟衣を付けて出てこられ、「やりましょう」といって御信者と共に御宝蔵に向われた。この時は既に雨は傘もいらぬ程に小降りとなっていた。

御宝蔵から長持ちを運ぶ

長持ちが本堂に持ち込まれ、ご宝物が次々と奉掲される。本堂正面左に日興上人の御本尊が奉掲された。一見してまぎれもない日興上人御真筆御本尊である。保存状態も極めて良好である。

一、日興上人御本尊

徳治二年十二月七日

縦一〇六・八cm 横五七・六cm 三枚継
脇書「陸奥國六丁目住（以下削損、その右に）新田卿公弟子」
『日蓮正宗史の基礎的研究』では「新田四郎死」となっていたが、実見により右の如く読み改めた。
一、日蓮大聖人『妙法尼御前御返事』断片一行
「学し候しか念願すらく人」（『新定』二－一八五九頁、『定本』二－一五三五頁、『対照録』中－一〇〇頁、『日蓮聖人真蹟集成』四－二八二頁）
一、日蓮大聖人御真蹟断簡一行
「初三報従重」（『新定』三－二五六五頁、『定本』四－二九六五頁、『対照録』下－三三四頁、『日蓮聖人真蹟集成』五－一七〇頁）
一、伝日代上人御本尊
至徳二年二月六日
縦七〇・四cm 横二六・一cm 二枚継
脇書「授与之上野徳太夫」
日代師の御本尊は『御門下御本尊集』（立正安国会編）所収の康応二年六月八日書写御本尊、『日蓮聖人門下歴代大曼荼羅本尊集成』（宮崎英修監修）所収の嘉慶二年八月書写、康応□年六月七日書写御本尊の三幅を拝見できるが、「法」「経」などの独特な感じが、年次もそう離れていないにもかかわらず見られず、自署の右に「日興上人伝燈法師」（伝燈だけはあるが）と記される特徴も見られない。全体的にも同人の筆とはなしがたく伝日代上人とした。
上代の主だったものは以上である。

西山本門寺末 福正寺の本堂

日興上人御本尊の脇書が読み改められたのは、延慶三年二月二十五日の御本尊脇書に「新田四郎信綱後家」とあって新田四郎信綱がこの時既に寂していることがわかるが、「新田四郎死」とあるのはまさに信綱の死を云ったものかと予測していただけに、残念でもあり、また誤った予測を軽率になにかに書かなくて良かったと胸をなで下ろしもした。大聖人の御真筆は持ち込んだノートパソコンの、「御書システム」でなんなくデータが得られた。それを見ていた住職はじめ他の僧侶御信徒方も眼を白黒させて感心の体であった。
写真撮影も順調に終り、住職に特に日興上人御本尊脇書の件など、新たにわかったことなどを報告し、御礼を申し上げ帰ろうとすると、大奥様が是非ともお昼を食べていって下さいと云って下さった。あつかましいとは思ったが、せっかく用意して下さったのであるから遠慮なく頂戴することにした。朝から炊きあげた赤飯がとてもおいしかった。
十二時頃、重ね重ね御礼を申し上げ福正寺を辞した。

行学研修会〔リレー発表〕⑤

私の信仰の原点を振り返って

高槻地区　橋本義一

この度のテーマ「私の信仰の原点を振り返って」は、企画と総務の人たちといろいろ相談していました折に、たまたまご住職からアドバイスしていただいたものであります。が、生来呑気者の私は自分の信仰の原点など考えたことはありませんでした。

さていったい〈原点〉とは、と辞典を調べました。私の手元にある明治・大正初期の辞書には、原点という熟語はありません。昭和に入りまして数冊の辞書に、

一、現象面にとらわれないで、そのものの持つ一番根元的な問題にまでさかのぼる。

一、もとになる点

一、基準になる点

一、座標軸に交わる点

などと出ておりました。生来迂闊な私は、辞書を調べるまでは、信仰の動機を「信仰の原点」と錯覚しておりました。では、どんな錯覚をしていたのか、その中身をお聴きいただきたいと思います。

私は昭和八年、満州事変に現役兵として従軍。昭和十年一月現役を除隊、次に昭和十二年七月、日支事変（後に日中戦争と改称）に召集（赤紙）を受けて、天津・北京・石家荘・大原・黄河へと進みましたが、ある時、山西省の原野で星一つ見えない真っ暗闇（日本では到底想像ができない、百八十度見渡しても何も見えない闇です）の露営の夜でした。

俺は何のために生まれてきたのか、敵を殺し、何れ自分も殺されるであろう。死とは、生とは、国家とは、と二十六歳にして初めて死と生とを考えましたが、まことに迂闊千万な者でございました。

やがて昭和十五年四月召集を解除され日本へ還ってまいりました。折しも国は、国家総動員法による、物と値段の統制が施行されるまっただ中、私は厚生省の嘱託を拝命、七・八年間はこれに没頭いたしておりました。そうした日々のある日、阪急三宮駅近くにありましたかしわ屋の前で、籠の中の鶏が交尾しているのを見ました。間もなく殺されるであろう鶏が…。

人間も生きる目標も目的も持っていない者は、この鶏と同じではないか――人間本来の生き方、真実の生き方とは何だろう――。

そんなことがあってから、キリスト教・モラロジー・生長の家・禅宗と遍歴しましたが、中でも禅宗が気に入りまして参禅を続けていましたが、そんな時創価学会の折伏を受け、如来寿量品第十六、永遠の生命論で説得され入信しました。

この様な次第で、〈原点〉はかしわ屋の籠の中の鶏と思いこんでおりましたが、このことを老妻（つま）に話しますと、

「何言うてなはんねん、原点はお母さんのお題目やないの」

と申しました。

全くその通り、鶏の話は信仰にいたら

ユーモアたっぷりの橋本さんの発表

しめた動機であって、原点ではないと気がつきました。そして、私の信仰の原点は、老妻が言いますように、まさしく三つ子の頃からの「母の題目」でした。小学校三年生頃から、

「義一、おいなはれ」

と、団扇太鼓での寒修行に連れられました。七十年前の奈良の街、奈良公園のいわゆる防犯ガス灯の下を、私は提灯に火をつけて、母に随って寒行についていきました。

戦場で、今日は助からん死ぬだろう、と激しい戦争の時、こんな時に「南無妙法蓮華経」と思わず唱題させてくれた母、私が転んでけがをした時、また、左の手のひら一面に火傷した時、

「大火所焼時　我此土安穏　天人常充満」

と、唱えながら手当てをしてくれた母。これこそ、「私の信仰の原点」であると思います

そして、私には第二の信仰の原点と申すべき、原点がございます。それは、源立寺ご住職菅野憲道御尊師であります。昭和五十五年十一月二十八日、妻に連れられて初めて源立寺へお詣りしたとき、ご住職から、「信仰の本義と御本尊」についてお話を承りましたが、これは生涯忘れません。

十一月二十八日は私の誕生日ですから、生まれ変わるべく、この日を選んだのですから忘れません。そして更に忘れることのない大切なことがあります。それは昭和五十九年七月七日、「日蓮大聖人伝」の講義第一回でした。ご住職は、

「教とは行じてこそ教である。大聖人様は行じることを教えられている。大聖人様のお振る舞いを拝して行じていきたい。これから何回続けられるか、何か一つをしっかり身につけていただきたい。講師こそ一番勉強しなければならん、言い換えると、講師を勉強させると思って一つつき合っていただきたい。」

これは、当日、しっかりとノートしたものでありますが、全く感銘深いお言葉でありました。

終わりに、原点を振り返って思いますに、母は身延の信者でありましたが、子供がケガをした時、あるいは何か大切な時には、人前であろうが、道端であろうが、母は先ず唱題、そして自我偈の「大火所焼時」を唱えました。この母の事どもを、そして更には、九月の八日と十三日のお講で、「寺泊御書」の講話を拝聴しまして大きな感動を受けました。

原点を振り返る、まことに厳しいことで未熟な自分を深く反省いたしました。

八十四歳の今、老境に在る私ではありますが、母の信仰にも及ばないと思いました。でも入講させていただいて十六年、未だ十六歳の少年です。これからもご住職につき切ってまいる所存ですが、ご住職を初め皆さんよろしくお願い申しあげます。これで終ります。有り難うございました。

ちょっと寄り道⑲

まさかの合格、不合格

伯耆の里　もりたかんどう

試験には不思議な魔力がある。自分の実力を評価してもらえるわけだから、合格すれば勢いづいて、次への弾みになる。落ちれば落ちたで悔しさからムキになり、再度挑戦と相成る。一太郎のインストラクター試験の合格は、単に一太郎だけではすまなくなった。気がつくと、ここ七年の間に、六回も試験を受けていた。

試験には手応えというものがある。絶対大丈夫だとか、何とかいけそうだなとか、やはりだめかなとか、まったくダメだったとか。その手応えは、試験の途中から感じられるし、終わったときははっきりどれかに分かれる。

いい線までいったがきっとダメだろうと諦めていた試験が受かったのは、ロータス１２３。一太郎の翌年に受けた。試験官が事前に、うちの試験は落とすためにやります、とプレッシャーを与えるほどこの試験は厳しく、筆記八〇点以上、実技全問正解が合格ライン。一応の自信をもって臨んだが、試験というものは単にできるかどうかだけでなく、ある時間内という制約がある。この実技試験のとき、試験官は、落とすといいながらも、再三にわたって時間を延長してくれた。きっと全員の出来が悪かったのだろう。私は最後の一秒まで問題にくらいついていた。実技は全問やるにはやったが、一問だけ自信がなかった。惜しかったのですっかり落胆して帰ったところ、一月ほどして、合格通知がきたときは、まさかと信じられない思いだった。

ある年受けた桐のＳＥ（システムエンジニア）試験では、受験生八名のうち三名が鳥取県出身、しかも互いに顔見知りという偶然があった。その三人、そろって落第したのもつき合いがいい。ちなみにこのときは合格者なしだった。再試験を翌年受けたときは、受験生は私一人。試験官は前回と同じＹ氏、試験問題も前と同じという恩恵に浴し、夕方帰るときは口頭で合格を予告された。みぞれ混じりの帰途、貴乃花と宮沢りえが別れたというニュースを心おだやかに耳にした。

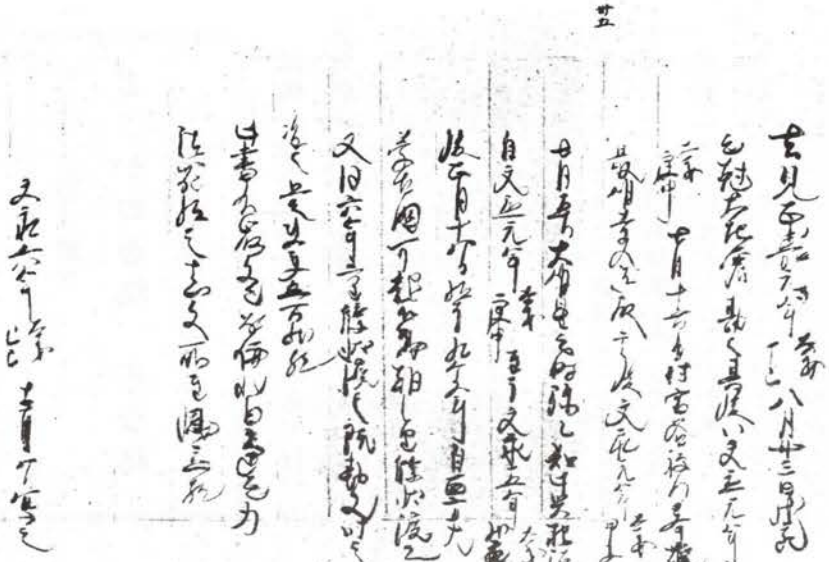
その逆に、手応えから今度は絶対大丈夫と、通知を前に早々と祝杯をあげたのに、すれすれで落ちたのが、ｗｉｎｄｏｗｓのＭＯＴ（マイクロソフト・オフィス・トレーナー）の二度目の試験。通知を手にして、納得できないものの、もうやめろということかと受け止めた。

通算成績は三勝三敗。失敗はどれもよく覚えている。仏の顔も三度までというから、以後は受けていない。

（大安寺住職）

「弟子分帳」と十七回忌〔十四〕

松田銘道



末尾に「之れを写す」と写本したことを示す「立正安国論奥書」

②「弟子分帳」と「立正安国論」

イ、「立正安国論」の書写と「安国論奥書」

「安国論奥書」は、三十五紙に及ぶ「立正安国論」を書写し畢えられた大聖人が、その後一紙半に流れるような筆の運びで認められたものでその最後には、

「文永六年〈太歳己巳〉十二月八日之を写す」（全集三三頁）

と日時までも記されています。

書写された「立正安国論」は「奥書」とともに、依頼主の矢木式部大夫氏に授与されました。文永六年のこの時期には「立正安国論」への関心が高まっていて、他にも信徒からの書写依頼があったことが、半年前の五月二十六日の書状「安国論送状」―内容から「安国論書写依頼状」と称すべきもの―から知れます。書状は、

「立正安国論の正本、富木殿に候。かきて給ひ候はん。ときどのか又」（全集三五頁）

と記されただけの大変短いものであり、文面からは依頼主が不明ながらも書写の依頼があったことが窺えます。

大聖人はこの時、書写するだけの時間的余裕がなかったようで、富木氏の手元元に保管してある「立正安国論」の正本を、富木氏か他の適当な人に書写してお届けするつもりでいると、返事を伝えられ対処されています。

こうした書写依頼は、蒙古から牒状がもたらされたことによって、「立正安国論」の予証が現実的になってきたことおそらく関係していると思われます。

	書写及び献上年月日	対象者	真蹟所在	出典
①	文応元年七月十六日	北条時頼	無	「安国論奥書」等
②	文永五年三月頃	北条政村	無	『日蓮聖人大事典』
③	文永五年三月末	北条時宗	無	「安国論副状」
④	文永五年八月二一日	宿屋入道最信	無	『日蓮聖人大事典』
⑤	文永六年十二月八日	八木式部大夫	有	中山法華経寺蔵
⑥	文永八年九月十二日	平頼綱	無	「一昨日御書」
⑦	弘安元年	不明	有	京都本圀寺蔵
⑧	不明	不明	有	京都本覚寺他九カ所真蹟断簡一四点
⑨	不明	不明	曽存	身延久遠寺曽存
⑩	不明	不明	曽存	真間弘法寺曽存
⑪	不明	不明	伝真蹟	峯妙興寺蔵

大聖人の安国論書写についての諸説

文永五年から「方々」へ度重なる諫暁をされた大聖人は、同時に「立正安国論」もまたしばしば献上されています。信徒からの書写依頼などを含めると、大聖人はかなり数多くの「立正安国論」を書写されていたものと思われます。そのため大聖人は「安国論奥書」に「之を写す」と記されていたように、手元にその原本ともいえる「立正安国論」を常に所持されていたようです。

そして当時の状況や現存する書写本や断簡等から推測すると、大聖人は少なくとも次のような状況化において「立正安国論」を書写されたのではないかと思われます。発表されている諸説も含めて年代順に図示したのが上の図ですが、図のような状況下において「立正安国論」が書写されたものと思われます。

順次検討を加えてみます。

①は、真蹟が存在する書状によってその事実が確認できます。

②は、『日蓮聖人大事典』における「文永五年執権時宗への『安国論』上呈に先だって、時宗と執権職を交替した前執権北条政村にも上呈したという」との記述によりますが、推測となる出典等は示されていません。

③は、かつて身延に真蹟が一紙十行存在していたとされる「安国論副状」によっていますが、その書状は焼失し、日朝師本による写本が伝わっています。系年の文永五年と、対告者の北条時宗とは鈴木一成師の説によるものです。

『日蓮聖人大事典』では「このときの『安国論』が身延山に明治八年焼失するまで存在した今いう『身延曽存本』であった」と述べていますが、それはおそらく日朝師本に、

「私云　是当山に御座す安国論御真筆

の奥に之有り」（定本四二一頁）と日朝師が記したものと、鈴木説の系年等を加味した説であると思われます。

④は、『日蓮聖人大事典』において「執権に『安国論』の上呈を取り次いだ宿屋入道最信にも同年八月二十一日に進覧したという」との記述によりますが、推測となる出典等は示されていません。

⑤は、後に述べるように信徒八木氏からの書写依頼によります。⑦の広本に対し略本と称されています。

⑥は、「一昨日御書」の、「仍て御存知のため立正安国論一巻これを進覧す」（全集一八三頁）との記述によりますが、真蹟本は現存せず日朝師の写本が伝わっています。

⑦は、広本と称されるもので真蹟が存在します。書写された経緯等については後に述べることにします。

⑧は、数多く存在する断簡ですが、この断簡については中尾堯氏が「この断片が果たして何種類の写本に分類できるかはわからないが、恐らくは六のグループにわけられるのではないかと思う」（「日蓮筆『立正安国論』とその紙背『本朝文粋』巻十三の成立と伝来をめぐる研究」・古文書研究二六号）と述べ、次のように分類しています。

一＝妙覚寺蔵①③⑤⑩、本成寺蔵②

各地に散在する「立正安国論」の断簡は十数種類といわれる

二＝妙興寺蔵④

三＝本圀寺蔵⑥⑨

四＝本経寺蔵④、聖運寺蔵⑧

五＝本満寺蔵⑪⑭

六＝平等会寺蔵⑫⑫、某蔵⑬（私注、①～⑭は断簡の番号）

⑨は、③で時宗へ献上されたとの説を今は用いることにしますが、献上本がどのような経緯で身延に所蔵されるようになったかは、あらためて検討が必要です。

⑩は、庵谷行亨氏によると「完本ではなく切損（きりそんじぼん）本として伝来していたもので、その後、散失してしまい今はない」（『法華』八三－一号）と、散失して弘法寺に現存しないとしています。散失したものについては宮崎英修氏が「この安国論は、現在は、大は四行（峯妙興寺蔵）より、小は九字（高田長遠寺）に至るものが僅かに九片、七ケ寺に散在しており、「安国論切」と称されるべき状態で現存している」（『法華』三九－六）との見解を示しています。

散在しているこれらの断簡が、⑧の分類とどう関連するのかについては今後検討を必要とします。

⑪は、真蹟本とされていたものですが、宮崎英修氏は鎌倉時代の写本であろうとの見解を示しています。

これらの諸説をすべてまとめると都合十五本以上の「立正安国論」が書写されたことになります。しかし、出典がはっきりしない推測のものもあり、はたしてどれだけ書写されたのか、はっきりした数は掴めません。

しかし信徒からの書写依頼もあったことや、「立正安国論」をしばしば献上されるような社会情勢でもあったことも考慮すると、少なくとも十本前後の書写がされていた可能性は十分あると思われます。

同一の書状をめぐってこれだけ多く書写された例は他になく、大聖人が「奥書」に、

「この書は徴有る文なり」（全三三頁）

との「立正安国論」を、いかに重要視し続けられたかが知れます。

本論でも既に触れたように「立正安国論」に関する書状もこれまた数多く存在し、それも文永期から弘安期の長きに亘っています。例えば晩年の弘安四年七月一日の書状「曽谷二郎入道殿御返事」―日興上人の書写本あり―には、

「蒙古の牒状已前に、去る正嘉・文永等の大地震・大彗星の告げに依て、再三之を奏すと雖も、国主敢て信用無し。然るに日蓮が勘文粗仏意に叶ふかの故に、此の合戦既に興盛なり。此の国の人人今生には一同に修羅道に堕し、後生には皆阿鼻大城に入らん事、疑ひ無き者なり」（全集一〇六九頁）

と述べられています。

ここには、

a、蒙古の牒状が届く以前に「再三之を奏」したこと。

b、「立正安国論」に予証した他国侵逼難によって、国が修羅道に陥っている現状を深く憂えられていること。

以上のことを確信されています。

aの「再三之を奏」したとの表記からは、図の①と②の間においても、幾度か「立正安国論」を献上されていた可能性も窺うことができます。

また、bでは国主が「敢て信用無し」との態度を取り続けたことが、国が乱れている大きな要因となっていたことを晩年にいたってもなお強く指摘し続けられています。

そしてその確信は、「正嘉・文永等の大地震・大彗星等の告げ」が見事に的中していることの証明でもあったのです。

文永五年に「立正安国論」を書写し畢られた大聖人がその「奥書」に、

「正嘉より之を始め文応元年に勘へ畢る。去ぬる正嘉元年〈太歳丁巳〉八月二十三日戌亥の刻の大地震を見て之を勘ふ。其の後文応元年〈太歳庚申〉七月十六日を以て、宿屋禅門に付して、故最明寺入道殿に奉れり。其の後文永元年〈太歳甲子〉七月五日大明星の時、弥此の災の根源を知る」（全集三三頁）

と記され、正嘉の大地震と文永の大明星によって「弥此の災の根源を知る」と確信されたことは、おそらく「立正安国論」を書写される度に懐き続けられていたものであったと思います。

（つづく・正覚院主管）

天地つかの間

〔その十八〕

成田詳道

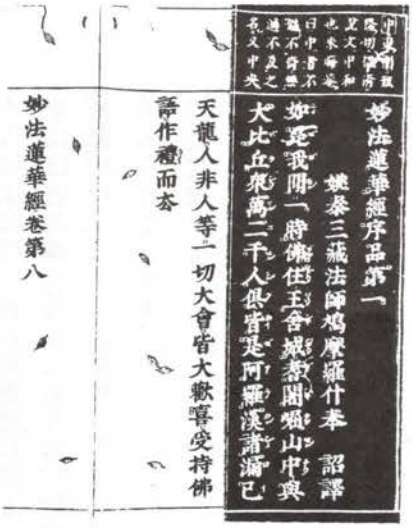
因果なことに、創価大学は当初、法学・経済学・文学の三学部で開校し、いまも仏教学部が開けない。なかで文学部に、社会学科と英文学科が存在した。そんなわけで、私は坊さんでありながら、仏教学部のない大学で、四年間を過ごした。これは、いまでも痛恨だったと思う。

社会学の授業は、東大紛争で死亡した、樺美智子さんの父、樺俊雄教授の講義に人気があった。氏は学生を意識してか「私は無神論者ですから、折伏してもダメですよ」と、笑いながら先手を打っていた。

大学がそうなら、わが宗門も、日常の勤行に、方便・寿量品の一部分を読むのみ。これがたたったのか、後に立正大の講義を受講中、テキストを読まされ「はじめ如是我聞より終わり作礼而去まで」の箇所を「サライジコ」と、やってしまった。

たちどころに、「君の宗門はサライニコとは読まないのか」と、教授にひやかされ、大恥をかいた。どうも私の仏教学に関する知識は、イロハの部分で脱字があるようだ。

法華経には、智恵第一と讃歎する舎利弗すら、信心によって仏と成り「信をもって慧に代える」と説く。そのため当家は、師弟ともに三毒強盛とか、愚迷の上に信を建立といって、智恵を積むのでなく、信を深めることを修行とする。それを良いことに、どうも土台作りをはしょって、建築物ばかりに目がゆく。


妙法蓮華經序品第一
姚秦三藏法師鳩摩羅什奉 詔譯
如是我聞一時佛住王舍城耆闍崛山中與
大比丘衆萬二千人俱皆是阿羅漢諸漏已
天龍人非人等一切大會皆大歡喜受持佛
語作禮而去
妙法蓮華經卷第八

始め如是我聞から終り作礼而去まで

大聖人は法華経二十八品を、さらに精選して、愚者迷者が飲みやすい、妙法蓮華経というエキスの珠にして、末法の衆生の首にかけたと、仰せである。ならば私たちは、この珠を飲んで、成仏をとげればよい。

しかし、大聖人がどのようにして、このエキスの精選方法を、悟られたのか。その過程を学ぶことも、末弟の責務ではないだろうか。そのためには、教学の裏付けが必要となる。

たとえば、法華経は諸経の王様である、という評価は仏教界の共通認識、と思いこんでいた。ところがこれには、古くより真反対の評価がある、と知り驚いた。それは「爾前経には、それぞれ網の目のような教義がつくされているが、法華経には効能書きのみあって肝心の薬がない」という。

これは誤解を招いてはならぬから、結論のみ紹介するが、爾前経において各細目を説いたので、仏教全体の根源たる法華経では、総括的に、仏法の讃歎に終始し、法華経自体の説明がないという。私はあらためて、法華経について、何も知らないことに気がついた。（源立寺執事）

新春を迎えた源立寺山門

恵日だより

元朝勤行会

一月一日（水）

初春の第一歩を踏み出だす、元旦の陽気はおだやかな、暖かい気候で祝福された。初勤行ののち、御住職より、

「新年のスタートを迎え、各人の抱負や希望を秘めて、読経唱題されたことでしょうが、元朝勤行を本門の大御本尊のまえで、迎えたことじたいが、なによりの喜びである。仏教では色心不二とか、境智一如と説くように、人の心と環境である世間とは、決して別々の存在ではない。個人の考えや振るまいが原因となって、社会に結果をもたらすのだから、妙法蓮華経と唱える行為が善因となり、やがて世間に善果を生み出すことになる。年の始めに善因を積んで、善果をのぞむことは大切である。しかし、むずかしいのは、それを持続させることにある。本日お寺に参詣されて、信心殊勝な第一歩を踏み出した気持ちを、三が日だけで終らせることなく、一年間とうして持ち続けて下さい」（要旨）

とご指導があり、最後に丑年にちなみ、

おこたらず 往かば千里の はても見ん
牛の歩みの よし遅くとも

との、先人の歌を紹介して、締めくくられた。

盃の儀

ひきつづき参詣者には、御宝前のお流れの「お屠蘇」と「昆布」が振る舞われ、用意された樽酒をかこみ、しばし歓談の初花が咲いた。

成人式

一月十五日（水）

住職をはさんで成人式の記念撮影

恒例の成人式が、新成人の、榎本千絵さん（豊中市・箕面地区）大熊裕美さん（池田市・旭丘地区）のお二人のほか、祝福に駆けつけた法華講員とともに、午後二時より行われました。

式は、読経・唱題、次いで日興上人の御真筆本尊頂戴の儀と進められた後、住職の祝辞、青年部の祝辞、花束贈呈があり、記念撮影をもって終了しました。

幹事会ニュース

一、地区総会について

地区総会における、各地区の方針につき、地区役員から発表がありました。

①青年の育成と、青年を主体とした、話し合いにしたい

②日常生活を、御本尊中心の生活に

③自己紹介、宅お講の充実・日程計画

青年部の一人一人から、本年度の決意が披瀝され、その環境づくりの努力と、協力等、力強い発言がありました　（佐久間）

【訃報】

〔西淀川区〕

観心妙澄信女　一月三日寂

俗名　佐藤澄江之霊　行年　六十六歳

〔此花区〕

貞観院妙道信女　一月十一日寂

俗名　佐々木サダ子之霊　行年　八十六歳

この度、右の方々が他界せられました。

謹んでご冥福をお祈りします。

各種行事のご案内

◎節分会のご案内

2月3日は節分です。節分は大寒の終る時と、立春の始まる時との境い目で、日本では古来より「追儺（ついな）の儀式」と称して、鬼うち豆をまきました。日蓮正宗では「鬼は外、福は内」とは言わず、「福は内、福は内」と豆をまきます。源立寺では毎年、午後7時から読経唱題をし、豆まきをいたします。

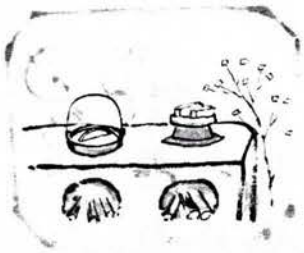
つきましては丑年の方、年男・年女に

当たりますので、ぜひ豆をまいてください。当日、受付にお申し出下されば、結構です。

◎興師会のご案内

二月七日は日興上人の御正当会にあたり、興師会が午後七時から奉修されます。

興師会は、御開山日興上人が「芹（せり）」を好まれたといい伝えられ、御宝前に芹をお供えするところから、別名芹（せり）お講ともいわれています。



継命・恵日発送係より

最近、返送されてくる郵便物が、時々あります。

住所や郵便番号に変更・誤り、町名地番の改称等がありましたら、速やかに源立寺までご連絡下さい。

また、『恵日』の発送作業の過程で、落丁・乱丁によってご迷惑をおかけした方があったようです。

今後そのようなことがありましたら、遠慮なくお申し出下さい。お取り替えいたします。

経本と念珠について

ながいこと使用された、経本や念珠の処置にお困りの方は、お寺に持参して下さい。お寺にて、丁重に処分をいたします。

また、形見の念珠や、高価な念珠については、有料にて修理も出来ます。詳しくは受付に、ご相談下さい。

【恵日俳壇】

〔宮下 留代〕

御年玉 受けてにっこり 幼（おさな）の手

遠来の 猫と戯むる 三ケ日（さんがにち）

【如月詠草】

〔坂本 フミ子〕

活け花の 梅捨てがたく 土に挿す

ふたたび芽吹く 季を待ちたり

盆栽の 松は花芽を 整えて

虚飾なる美の 枝さし伸ばす

〔橋本 義一〕

提灯もて うちわ太鼓の 寒修行

母の供せし 七十年前

らんかんに 横一列の ゆりかもめ

師走まひるの 太陽一ぱい

〔橋本 圓子〕

見はるかす 太平洋の 水平線に

宗祖を偲ぶ 安房の小湊

北斎の 赤富士の版画を 眺めつつ

日毎に偲ぶ 開祖の遺徳

二月の行事

一日（土）　午後二時　お経日
二日（日）　午前八時　講中勤行会・幹事会
三日（月）　午後七時　節分会
七日（金）　午後二時　広基寺お講
　　午後七時　興師会
九日（日）　午後一時　お講・御誕生会・役員会
十三日（木）　午後一時　お講
十五日（土）　午後二時　教学研鑽会
二十三日（日）　午後二時　法華経講義

※二月一日の継命新聞の発送は、『蛍池・服部』が担当地区です。

合同地区総会のご案内

二日（日）　午後一時　槻木・緑丘・高槻地区
十六日（日）　午後一時　庄内・宝塚・服部地区
二十六日（日）　午前十時　箕面・川西・神戸地区

※合同地区総会は、源立寺本堂にて行います。
講員の皆さまには、ふるってご参加下さい。

恵日

平成九年二月号　通巻二十四号
平成九年二月一日発行

編集兼発行人　菅野憲道

発行　恵日編集室
〒五六三　池田市槻木町一―一〇　源立寺内
TEL（〇七二七）五一―三一三五
購読料　定価一〇〇円（〒別）